

[10] 「湧水湿地研究会」による湧水湿地目録作成の取り組み

富田 啓介[○] (法政大学)
大畑 孝二 (公益財団法人 日本野鳥の会)
糸魚川 淳二 (名古屋大名誉教授)

東海・近畿・瀬戸内地域を中心とする西南日本の丘陵地には、貧栄養の湧水によって形成された、泥炭の蓄積に乏しい小規模な湿地が点在しており、湧水湿地と呼ばれている。湧水湿地には、国や各地域のレッドリスト記載種を含めた希少種が多数確認されている。特に、東海地方の湧水湿地とその周辺には、ハナノキ・シデコブシ・シラタマホシクサなど、東海丘陵要素と呼ばれる地域固有・準固有の植物群が分布する。湧水湿地は開発圧の強い都市近郊に集中して分布する。このため、高度成長期以降急速に減少が進んだと推測され、現在もその流れは変わらない。近年、一部の湧水湿地は、ラムサール条約や天然記念物といった法的枠組みによって保全が行われるようになった。しかし、詳細な調査も行われず消滅の危機にある湿地も多数ある。そこで、保全上必要となるのが、「どのような特徴をもつ湿地が、どこに、どのくらい分布しているのか」という基礎的情報の集積である。この情報に基づいて作成された目録は、巨視的な視点で湧水湿地の分布要因を解析することを可能にし、湧水湿地の希少種の動態を知るカギともなるだろう。

ところが、湧水湿地は個々の規模が小さいため、網羅的な把握は極端に難しい。この問題を乗り越えるためには、市町村ほどの単位で熱心に地域の自然環境の研究と観察を続けてきた、在地の市民研究者や保全・観察グループの情報と機動力にすぎるしかない。発表者らは 2013 年、東海丘陵要素の主要な分布域における湧水湿地の目録作成を目的として「湧水湿地研究会」を立ち上げた。構成員は、上記のような市民研究者や保全・観察グループを中心に、自然保全拠点の職員や大学等の研究者も含まれる。現在、それぞれ熟知した地域を担当する形で調査が進められ、2014 年 8 月までに 500 件以上の湿地情報が集められている。発表者の 1 人である糸魚川は 1991 年、「日本シデコブシを守る会」を立ち上げ、今回と同様の方式によってすでにシデコブシの網羅的分布を把握している。湧水湿地研究会はこのネットワークの流れを汲んでいる。

調査は、湿地ごとに、名称・位置・社会状況・自然状況・略図・生物相を記録する方式である。何度か合同調査を行い、湧水湿地の定義や、調査方法をすり合わせてきた。広域の湧水湿地の保全・研究に関わる者が、このように意見交換を行うことはこれまでほとんど行われなかった。湧水湿地研究会は、広域の湧水湿地の目録を作成し、科学的分析を加えることとともに、地域を越えた湧水湿地保全・研究のネットワーク作りも目指してゆく。